

中世の「東海」地域史研究に関する覚書

水野智之*

はじめに

近年、中世の「東海」地域史に関する研究成果が多く公表されている。本稿では適宜、「東海」と表記するが、その理由は中世において「東海」地域やその構造、人々の認識などは自明なことでなく、研究対象として解明すべき課題であると考えているためである。

中世史研究会では、二〇一二年九月に「日本中世史のなかの東海地域」というテーマで四〇周年記念大会を開催した。その成果は翌年五月に刊行された『年報中世史研究』三八に収載されている。この大会の趣旨は「一地域史の議論にとどまるものではなく、日本中世のなかの東海地域という、地域史を取り上げつつも全体史の再考をせまるものという新しい研究を意図したもの⁽¹⁾」であつ

た。

東海地域が大会のテーマに取り上げられたことは、一九九〇年代より東海地域でいくつかの自治体史の編纂が新たに開始され、二〇〇〇年代以降にそれらの刊行が相次ぎ、研究環境が向上したことと無関係でない。例えば、『愛知県史』の中世に関する編年の資料編は二〇〇一年から二〇〇九年にかけて三冊が刊行された。織豊期に関する編年の資料編は二〇〇三年から二〇一一年にかけて同じく三冊が刊行された。編年になじまない中世・織豊期の史料は別編として二〇一四年に一冊が刊行され、これらの資料編をもとに、二〇一八年には中世から織豊期にかかる通史編の二冊が刊行された。他にも愛知県内のいくつかの市町村史が新たに刊行されたため、総じて尾張・三河に関する研究は大いに進展したと言える。『三重県史』中世の資料編も二〇一〇年代に刊行されて

いて、既に先行していた『岐阜県史』、『静岡県史』とあわせて、愛知・岐阜・三重・静岡県の県史が揃ったことで、東海地域を研究する環境は格段に向上したのである。

「東海」や「東海地域」を書名に掲げ、東海もしくはその領域内のある地域を考察した研究書は相次いで刊行されている。渡辺尚志編『移行期の東海地域史―中世・近世・近代を架橋する―』（勉誠社、二〇一六年）は静岡県域を対象として中世・近世移行期と、近世・近代移行期の二つの大きな転換期の様相を解明したものである。主に静岡県域を対象とした考察であつても、「東海地方」に俯瞰して考え得るものとして構想され、その試みは中村只吾・渡辺尚志編『生きるための地域史―東海地域の動態から―』（勉誠出版、二〇二〇年）に発展的に継続されている。小和田哲男『東海の戦国史』（雄山閣、二〇一六年）は、東海地域の戦国時代の様相を描く。これは「地域から見た戦国一五〇年」全九巻として、全国を奥羽・関東・北陸・甲信・東海・畿内近国・山陰・山陽・四国・九州琉球という九つの地域にわけて、それぞれの戦国史を描くシリーズの一書である。また、山田邦明は三河、遠江などの領主やその地域社会を扱った論文を『中世東海の大名・国衆と地域社会』（戎光祥出版、二〇二二年）としてまとめている。地方史研究協議会編『「出入り」の地域史』（雄山閣、二〇二三年）はコロナ禍で開催が一年延期され、二〇二二年に三重県で対面・リモート両形式で実施された地方史研究協議会による第七二回（三重）大会の成果である。対象は主に三重県域の事象を扱った

ものである。

東海地域史の研究は二〇二四年に『東海の中世史』（全五巻、吉川弘文館）と『東海道中世史研究』（全二巻、高志書院）が刊行されて、一層進展した。『東海の中世史』の各巻は時代で区分され、様々な論点からおおよそ現在の愛知・岐阜・三重・静岡県にかかる東海地域の状況を明らかにしたものである。その企画は、二〇二〇年から進められ、筆者も企画編集委員として編集、執筆に従事した。⁽²⁾『東海道中世史研究』は二〇一九年に静岡県富士市・富士宮市・静岡市で開催された中世史サマーマセミナーを契機としている。ここでは中世における駿河の「境界」という地理的・政治的な状況をより深く示すものという目的で進められ、論文集を作成するにあたっては東海道を往来・移動する人々やモノへの視点、さらに中世後期だけでなく、中世前期の研究を含める方針にしたという。⁽³⁾

二〇二四年には中世史研究会編『日本中世の東西と都鄙』（思文閣出版）も刊行された。これは中世史研究会五〇周年を記念して二〇二二年九月・二〇二三年九月の二回にわたって開催された大会報告をまとめたものであり、日本中世社会の東西及び都鄙の状況を扱った論文集である。ここに収録された拙稿「東海」地域の成立と京・関東⁽⁴⁾では、政治権力の観点から、「東海」地域が一体性を強めた時期を考察した。ここでの「東海」の把握をめぐっては、大会報告の質疑の際に議論された。⁽⁴⁾すなわち拙稿の研究の意図は現代の東海地域を措定してその特徴を問うものか、あ

るいは中世において人々の「東海」地域の認識を探るものかという点である。拙稿の意図は後者であると説いたが、この点は「東海」地域を探る上で重要な視角である。この視角に立つ研究史上の位置づけについて、本論で取り上げることにはしたい。

二〇二五年には『東海の中世史』に関して、静岡地方史研究会や中世史研究会で書評会が催されて、その報告要旨や書評が発表されつつある。⁵ また、『東海道中世史研究2 領主層の共生と競合』収載の各論文については、拙稿「書評と紹介」で評価などを述べた。⁶

このように近年では東海地域史の研究が活発に進められているが、中世史の分野では、「東海」地域としての評価をめぐって、なお十分な研究成果が積み重ねられていない段階にあり、研究方法についても、あまり認識が共有されていない面がある。そのため、「東海」地域史の各研究を批評する際にも、一部には今後の研究の深化を妨げかねない意見すら散見される。

よって、本稿ではこれまでの中世の「東海」地域史研究の成果を確かめながら、その分析視角と評価を再考し、さらに研究を深化させる課題を述べることにしたい。

一 中世の「東海」地域史研究の動向と成果

（一）森浩一の「東海学」提起

近年、中世の「東海」地域史研究は活発になっていることを述

べたが、二〇〇〇年以前はどのような研究状況であったのか。それらは近年の研究と、いかなる違いが見られるのか。拙稿では、中世の「東海」地域史に関する先行研究について触れたが、一部言及できなかった研究成果があるので、それらを取り上げつつ、あらためて研究動向とその成果を捉え直しておきたい。

東海地域に着目した研究としては、「東海学」を提唱した森浩一をはじめとする一連の成果が挙げられる。愛知県春日井市では一九九三年より、春日井シンポジウムが年に一度開催され、「東海学」は古代史の研究成果を踏まえながら、八年目のシンポジウムのテーマとして提起されたものである。研究内容は、森浩一編『第八回春日井シンポジウム 東海学の創造をめざして』（五月書房、二〇〇一年）にまとめられている。森浩一の基調講演「東海学」の創造を目指して」では考古学の立場から、東北の前期旧石器捏造事件を受けて、考古学は地域の本当の姿を復元できるものであり、そういう意味で地域に勇気を与える学問であると述べている。⁸ その上で、いろいろな地域を一つの学問としてまとめみるべきではないかということ、一九九九年から「関東学」を描けないかと考え始めたという。この成果は森浩一・網野善彦編『日本史への挑戦―関東学の創造をめざして―』（朝日新聞社、二〇〇一年）に示されている。その頃、網野善彦も『日本社会の歴史 上・中・下』（岩波書店、一九九七年）で、日本列島の各地域の特色を踏まえた通史を描いており、各地域の歴史と特質について関心を寄せていた。このような経緯から、森浩一は東海への

関心を高め、「東海学」の提起をしたのであろう。

「東海の個性を探る」という関心のもと、福岡猛志、森浩一、司会の竹下景子の鼎談では、「東海学」とは正確には「東海・東山学」と言うべきであったとか、東海系土器の拡散性や伊勢と熱田という二つの神社の特異性、窯業と権力者など、様々な議論に及んでいる。また、大下武は「東海」の用語とともに、「坂東」「関東」「東」「東国」の使用例を一志茂樹『古代東山道の研究』（信毎書籍出版センター、一九九三年）の成果に基づいて検討しながら、「東海」のあり様を考察している¹⁰。これらの研究や議論は主に古代史や考古学の分野によるものであったが、その後NPO法人東海学センターの研究課題として継承され、現在では幅広い時代から「東海」の特質を探る検討が行われている¹¹。

森浩一の「東海学」の提起は「東海」という地域対象を明確化し、一つの学問にしたという点で大きな意義があったが、主に古代史・考古学の分野からなされたため、中世以降では十分な成果に至っていないかった。それはのちの課題となり、近年には中世の「東海」地域史の諸研究により、その内実が解明されつつある。

(二) 戦後から一九七〇年代初めまでの状況―中村栄孝『東海風土記』の刊行―

「東海」という地域を対象とする研究について、森浩一の「東海学」提起以前にそのような試みがなされなかったかと言えば、そうではない。例えば、中村栄孝は一九七一年に『東海風土記』（吉

川弘文館）を刊行している。これは、中村が「名古屋大学に在職して、戦後の荒廃から復興と発展を示した地域社会のなかで生活しているあいだに、折にふれて筆をとったもの」をまとめた論稿である¹²。ここで対象とした地域は、「伊勢湾の周辺に木曽川の下流域や三河湾をかこむ範囲であって、近ごろ常識的に東海とよばれる地域」としている¹³。続けて、この地方が、日本の風土のなかで、どのような地位を占めているのか、またどのような方向に進展していくのかを探ってみたいと述べる。内容は古代から現代にかけて扱い、「Ⅰ伊勢湾の周辺」「Ⅱ尾・三風土記」「Ⅲ木曽川治水」「Ⅳ郷土研究室―東海今と昔―」「Ⅴ豊国祭図の屏風―「カブキモノ」の絵すがた―」の五編にまとめられている。いずれも今日の自治体史などの成果の土台ともいえるべき各時代の様相や推移、特質などを説き、また徳川美術館所蔵の豊国祭礼図屏風に関わる傾奇者の考察を平易な文章で著している。

いずれの編も初出年次と出典が記されていて、どのような経緯で執筆されたのかをおおよそ知ることができる。例えば、「Ⅰ伊勢湾の周辺」は刊行にあたって、次のような追記がある¹⁴。一九五八年から三ヶ年にわたって中日新聞社の企画により「伊勢湾総合学術調査」が行われ、考古、美術・工芸、民俗・言語、歴史・地理・宗教、自然科学の五班に分かれて調査がなされた。その結果に基づき、一九六一年に「伊勢湾をめぐる文化史展」として資料が展示され、『伊勢湾をめぐる文化史―歴史、考古、美術―』（中部日本新聞社）という冊子が刊行された。「Ⅰ伊勢湾の周辺」は

その歴史編として執筆されたものであるという。

これより既に一九五〇年代末から一九六〇年代にかけて「東海」地域を対象とした歴史を叙述する試みがなされていたことが確かめられる。このような問題関心は、名古屋市及び伊勢湾周辺の臨海工業地帯の発展を様々な学問領域から捉え直すというものであったと見受けられる。いわゆる高度経済成長期に東海地域の急速な展開と変容を学問的に考察する試みであるように思われる。

中村栄孝は一九四八年に名古屋大学文学部に赴任したが、敗戦以前は、朝鮮総督府で『朝鮮史』の編纂にあたっていた。この点では三鬼清一郎の研究に詳しい¹⁵⁾。

中村は朝鮮総督府に赴任し、朝鮮人を使用される教科書『初等国史』の編纂にも関わっていた。中村の郷土史の考え方は、当時の国民科国史の文部省案と異なっていた。すなわち、文部省案では、「郷土に係係深キ史実ハ国史トノ関聯ニ留意シテ授クベシ」という規定であったが、総督府案では削除されていた。中村は文部省案の「郷土史」そのものに不信任を抱いていたと指摘されている。つまり、お国自慢のような郷土意識、偏狭な郷土愛などを退けた上で「国史教授の予備として郷土史を考ふべきでない。寧ろ郷土史は、全体の国史を授けた後に取り上ぐべき性質のものである」とする¹⁶⁾。三鬼は、この点に、賛否はあるにしろ、中村の地域研究のあるべき姿を模索する姿勢を読み取っている。『東海風土記』の各論稿や中村が全体構成を主導した『清洲町史』（一九六九年）には、そのような考えが及んでいるように思われる。他

に、中村は『清洲城と名古屋城―織田・豊臣から徳川へ―』（吉川弘文館、一九七一年）を著している。

(三) 一九七〇年代後半以降の状況―社会学・地理学・歴史学による『東海社会論』の刊行―

一九七九年には、芳賀登が『東海の風土と歴史』（山川出版社）を刊行している。これは、中村栄孝『東海風土記』の叙述と通じる体裁であるが、内容はより一層、詳細になっている印象を受ける。「伊勢の海」から説き起こされ、古代から現代にかけて東海地域内の特徴的な事例を挙げて叙述されている。中世では南北朝期以降に今川氏の動向が扱われていて、注目される。「東海」地域については、特に規定は見られず、現代のいわゆる東海地方が想定されているようである。

一九八〇年には、安藤慶一郎編『東海―ムラの生活誌―』（中部日本新聞本社）が刊行された。ここには愛知・岐阜・三重県のうち、いくつかの山村、漁村などを取り上げ、主に民俗学に基づく成果が叙述されている。

歴史学・民俗学とともに、社会学や地理学による東海地域の研究も確かめられる。安藤慶一郎・中田実・牧野由朗編『東海社会論』（東信堂、一九八六年）は、主に社会学、地理学、歴史学の分野から東海社会を分析したものである。これは、同じ編者による『地域の社会学―東海地方の社会学的研究―』（税務経理協会、一九七九年）の続編にあたる。

『東海社会論』のまえがきには、次のような記載がある。⁽¹⁷⁾

名古屋都市圏を中核とし、多様な個性をもつ諸都市群を擁するここ「東海社会」は、東西の「京」にたいする第三の京Ⅱ「中京」をめざして懸命に努力しつつ（中略）われわれはあらためて中央支配下にある「地方社会」の展開をたどり、その中に地域自治発展の可能性と、そこにおいて抛るべき地域に根ざした原理の発見を試みることに重要であると考える。

ここには「東海社会」の地域に根差した原理の発見を試みることが説かれている。前著『地域の社会学』での問題関心は「どちらかといえば全国的動向がここ東海社会にも貫徹していることの論証、いいかえれば「東海地方の事例を素材にして日本社会の諸特徴を語る」傾向が強かった」が、『東海社会論』では、「この課題をもう一步進めて、全国的同質性よりもむしろ「東海社会」の個性を解明することに重点を置こうとした」とある。⁽¹⁸⁾ここに研究の進展をうかがうことができる。

『東海社会論』第一章「東海地方の地域構造と歴史」のうち、「第二節 東海地方の歴史的展開」は、歴史学の立場から、塚本学が執筆している。ここでは「一、支配の区画」、「二、近世以前の東海地方」、「三、諸藩域から四県へ」の三項に分けて、次のように説いている。⁽¹⁹⁾

「一、支配の区画」では、古代国家の広域行政区である東海道

を述べ、その領域とのかの東海地方との違いに触れつつ、東海地方は畿内の支配者から見て「あずまの口」、つまり辺境への入り口といった性格を共有する地方と認識されていたと説く。鎌倉政権が成立すると、東海道の役割は高まり、基幹道路として美濃から尾張を出て、東山道と東海道を結ぶ道が活発になったことに触れ、鎌倉政権と畿内政権との両者の本拠地にはさまれた中間地帯という性格を有したことを述べる。

「二、近世以前の東海地方」では、住民の視点からそのあり様を説く。弥生文化期の東西日本の境の線は、およそ伊勢湾岸に置かれていたことに触れつつも、この地域の諸産物として窯業製品を挙げ、「東海古陶圏」として東海地方を単なる支配の区画でなく、畿内と関東との間に独自の「世界を形成する芽と見る」ことが可能であろうと説く。のちに、室町政権下において今川氏は関東公方の支配権に接する駿河の守護として「国境の重鎮」と呼ばれ、『今川仮名目録』という独自の分国法をもち、駿府を中心とする交通路を整備していたことから、今川領国こそが東海地方の独立性の強い政権であったと見なす。

「三、諸藩域から四県へ」では、近世から近代にかけての様相を扱う。まず、江戸幕府の大名配置の点から、伊勢湾岸一帯と三河以東との間で差があったことを指摘する。すなわち、尾張、紀伊は転封を経験しなかったが、三河・遠江・駿河三国では、江戸初期に徳川一門の領国拠点が駿府に置かれたことを除くと、すべて数万石以下の大名が配置され、転封も頻繁に行われた。これは、

今川領国であった地域とそうでない世界との差であろうという。この両地域には用水・交通路の管理・維持の違いなどを指摘しつつも、尾張以西の世界とその他の東海地方との交渉の活発化が見られ、徳川政権は東海地方内の相互交渉を従来よりも密にしたと評価する。その後、江戸時代末から明治時代にかけて名古屋経済圏が発展していったことを述べる。

このように東海地方の歴史を、通時代的にまとめ、その特質を挙げている。中世の「東海」地域の観点からすれば、今川領国についてその独立性を評価していることや、「二、近世以前の東海地方」で、「住民の活動からみてこの地域の性格はどのようなか」という問題提起に対して、「四県ないし三県域としてまとまったものを認めることは困難であり、むしろその中での差異から、各地住民の主體的な行動を察知することができる」と論じていることに注意すべきである。²⁰三県ないし四県の東海地方をまとめた地域として見なすことができるかどうか、その地域の特質とは何かについては、次節で扱うことにするが、いずれも重要な論点である。

他にも、「第四章 文化と社会的性格」のうち、塚本学・安藤慶一郎が「第一節 思想的伝統と背景」を執筆し、思想的伝統として一八〇三年（享和三）に刊行された『東海道人物志』に挙げられている人物の分析や尾張藩学、国学の賀茂真淵、本居宣長らをはじめ、国学者の文庫などを取り上げている。いずれも近世のことであるが、興味深い内容である。

この『東海社会論』刊行の背景は、先掲の中村栄孝『東海風土記』と同様に、高度経済成長を遂げる東海地域の発展から、その関心が高まっていたことや、当時の社会学の課題として「地方社会」の分析が挙げられていたことによるものと思われる。一九二〇年代の重工業の発展以降、戦後にかけて名古屋都市圏が形成されるとともに、一九六六年に地元主導の議員立法によって「中部圏開発整備法」の成立を見たように、他地域と異なり、「中部のことは中部で考えよう」（中部経済団体連合会設立趣意書、一九五一年）という地元での自意識に支えられた経済界の気運とその成功という風潮から、東海社会の関心が高まっていたということも推察される。

以上、二〇〇〇年代以前の研究について述べてきたが、いずれも「東海」への関心は名古屋市及び臨海工業地帯の発展が背景にあり、その地域的なまとまりへの関心から研究がなされる傾向にあったと思われる。また、中世の「東海」地域の領域などについて、厳密に検討することはうかがわれず、現代のいわゆる東海地方の領域を前提として考察がなされていると判断される。二〇〇〇年代以降の研究では、既に現代の「東海」地域の認識は、三県あるいは四県かという違いはあっても定着しつつあり、列島の一部として、「東海」地域の個性や特質を探るという問題関心となっている。ここには近代の臨海工業地帯の発展への展開とその前史という文脈は前面に出ていないように見受けられる。さらに、「東海」地域という領域について、現在の東海地域をそのまま前

提として考察するのではなく、大下武が「坂東」「関東」「東」「東国」という用語から、古代の「東海」地域について考察したように、当時の認識や実態を探るといふ姿勢が見受けられる。中世の「東海」地域については、二〇二四年に刊行された拙稿「東海」地域の成立と京・関東⁽²³⁾で、「東海」の領域を広域行政区の東海道⁽²⁴⁾の領域から、鎌倉幕府の成立後、次第にその影響下にある「関東」地域を除いた領域と想定した。後述するように、二〇二四年に刊行された『東海道地域史研究』でも同様の認識が示されている。「東海」地域に関する研究史を、二〇〇〇年代以降とそれ以前の研究史とに大きく分ける理由はここにある。近年では、中世の「東海」地域の領域は鎌倉幕府の影響から規定されたものとして捉えているのである。

二 中世の「東海」地域史の分析方法と評価

(一) 中世の「東海」地域史の分析方法

東海地域史に関する先行研究のうち、拙稿で取り上げていなかった主要な研究を扱い、その位置づけを試みたが、「東海」地域の分析や把握をめぐる、今後の研究においても留意すべき点⁽²⁴⁾が確認される。例えば、『東海社会論』では「東海地方社会（東海社会）研究の三つの視点」として、第一に次のことを挙げている。なお、傍線は筆者によるものである。

この地方の独自の性格は、まず、歴史的に形成されてきた「地方社会」内部の各地域（岐阜、静岡、愛知、三重）の特徴の総体としてとらえられる。とくに、藩政期にあつては、各時代によつて異なるとはいえ、東海社会としての共通性より、その内部の地域（藩など）の自足性にもとづく独自性が強く、東海地方としての共通性は、自然的条件（それは治水などの自然管理の方法や産業の様態、つまり生産力の水準の類似性として現われる）や地理的条件（上方・江戸間の交通路）のような外的な条件によるところが大きかった。こうした諸条件は、もちろん社会構造に影響を与え、同族団や共同体の解体の時期や程度を規定し、住民の意識や態度を一定の方向に変化させてきた。しかしそれはなお、東海社会としてのまとまりの現実化には及ばず、実在するものは東海社会を構成する各地域社会のみであつた。

この説明は江戸時代を想定したものであるが、中世にも適用することができる。中世の「東海」地域史を考察する上で、傍線部の指摘をどのように受け止めるのか、今後の課題でもある。この点は評価の仕方と関わるので、次項で扱うこととする。

第二の視点は、「東海社会の特徴は東西二大勢力（江戸・東京と上方・京阪）の接点ないし合流点であり、さらには日本の国土を東北と西南とに二分する中央地溝帯の接点であるところにある」ことである。その視点から「東海社会は、経済、政治、文化

等の各要素ごとに、どこに東西の区分線が引かれるかという形で問題となる」とともに、「東海社会は混合的でアンビバレントな地域としてとらえられる」とする。⁽²⁵⁾ その結果、東海社会時代の個性は「混合的」ということ以上には認め難いということになるが、この「混合性」から一種の雑種文化を形成する可能性もあり、東海社会がすぐれて日本社会的性格をもつという見方である。

この指摘は従来の歴史研究のなかでも言及されてきたことである。尾張、三河など東海地域の特徴としては、東西のはざまとか、中間地域などと説かれ、また、東国的か西国的かなどと考察されることもあったが、既にそのようなことの指摘のみでは「東海」地域の特徴は十分に捉えられないことは、二〇一二年の中世史研究会四〇周年記念大会にあたって述べた通りである。⁽²⁶⁾

第三の視点は、ここから「当地方を東西社会の接点として、東西両要素を視座に置いてみるのではなく、それらを含みこみつつも、一つの相対的に自立した経済的、政治的、文化的圏内とみる見方」を説くものである。⁽²⁷⁾ このような捉え方は「東海学」の提起や中世の「東海」地域史の視角に通じるものであり、研究の進展と見なすことができる。

これらの三つの視点のうち、近年の中世の「東海」地域史研究において、第二、第三の視点は既に克服できていると考えるが、第一の視点については、共有が十分になされているとは見なし難い。次項ではこの点を扱っていく。

(二)「東海」地域の領域とその事象の評価をめぐって

中世の「東海」地域史の研究は、先述の指摘、すなわち「東海社会としてのまとまりの現実化には及ば」なかったとする評価と、「東海社会を構成する各地域社会」からの評価をいかに受け止めて取り組むべきであろうか。非常に難しい課題ではあるが、既にこれらの視点に基づいて分析された研究も数多く見受けられる。よって、それらを整理しつつ、今後の研究の共有と深化に向けて、以下(a)～(d)の方法論としてまとめておく。それぞれの研究の意義を共有し、今後の分析を深める方法を、留意点とともに述べていきたい。

(a) 現在の東海地域内に所在する、ある地域や事象を取り上げ、その検討をしたり、特徴などを説明したりする方法

これは、例えば尾張、三河など、もしくは郡や荘園の領域など、東海地域内の個別事例を明らかにするという研究である。東海地域内に属する自治体史もこのような性格を有すると言ってもよいであろう。現に、筆者もいくつかの自治体史の執筆をした経験はあるが、「東海」という枠組みで考察したり、評価したりすることは乏しかった。⁽²⁸⁾ しかし、(a)の方法による研究も東海地域のある状況を明らかにするものと言える。

このような研究に対して、「東海」地域としての特徴や叙述がなされていないという批判は適切であろうか。「東海」地域の特徴とは、その領域やそれ以外の領域での状況を確認した上で見出しうるものであり、(a)の研究では必ずしもそのような視角を

備えているものばかりとは言えない。しかし、これらの研究は「東海」地域史の研究として資することがないのかと言えば、そのようなことはないはずであり、その成果に基づいて「東海」地域を考察することは行われるべきであろう。

(b) 現在の東海地域に含まれる事象を取り上げ、東海地域内での各地域の特徴などを説明する方法

これは、例えば、主に駿河国の事例から、東海地域のことを考察するといった『東海道中世史研究』所収の論文が挙げられよう。同様の視角に立つ研究として、先述した渡辺尚志編『移行期の東海地域史』や地方史研究協議会編『「出入り」の地域史』所収の研究を加えることができる。この視点は、『東海社会論』に示された第一の視点とほぼ同じ視角と言える。「東海」という地域の歴史や特徴を探る上で、現代の東海地方にかかるそれぞれの個別地域の特徴を探り、その集積の上に「東海」の特徴を捉えるということは一定の有効な分析であり、「東海」地域の実態に迫ることができるようになる。

このような研究に対して、例えば、駿河国の事例の分析をもとに、「東海」地域の特徴を考察した研究に対して、「東海」地域内の他国の分析例がなされていないという批判は十分に有効であろうか。まずは、提示された研究に対し、「東海」地域内の他国の事例から見た分析や見通しを得た上で、その特徴をどのように考えていくか、さらに発展的に継承することは研究上適切であると思われるが、他国の分析例がないと指摘するだけでは、研究の有

効的な継承や発展を望み難い。安易にこのような評価を下さないよう、他の事例を考証した上で評価をしていく必要がある。

(c) 現在の東海地域に含まれる事象を取り上げ、東海地域以外の事例及び全国的な状況と比較・検討した上で、「東海」地域の事象の特徴を説明する方法

このような研究は、例えば、岡野友彦の説く伊勢神宮領が全国にどの程度見られるかを探り、その上で東海地域には神宮領が多いことから、伊勢国を中心とする東海経済圏の存在を説明し、「東海」地域の特徴とするような成果が挙げられる²⁸⁾。この成果は「東海」地域の特徴を掴みやすく、「東海」地域史としても認識しやすいと言えよう。

これより(a)の視角にある研究であっても、(c)の視点で捉えることによって、新たな側面や評価を得られる場合がある。そのような考察は今後大いに試みられるべきであろう。ただし、『東海社会論』の指摘にあるように、日本列島全体を見通す上での特徴を示すものとして評価するのか、あるいは「東海」地域としての個性として評価するのかによって、その意味するところは変わってくるように見受けられる。「東海」地域史としては、前者の評価にも留意しながら考察しつつ、後者の評価の方に重点を置くべきであると思われる。研究史の進んできた方向性としては、後者であるように見なされる。

(d) 中世の「東海」地域の領域や認識を探る方法

これまでの(a)から(c)の研究は、そのほとんどが現在のの

東海地域の領域やそこでの事例を前提として考察するものと言えよう。ただし、中世における「東海」地域という一体性や認識が存在したかどうかは自明のことではない。既に、『東海地域論』のなかでも、「東海社会としてのまとまりの現実化には及ばず」という指摘がなされている。しかし、本当にそのまとまりがなかったかどうかの検証も十分に行われていないのではないのか。

近年の研究動向の特徴として挙げられる点は、この「東海」地域の一体性や当時の人々の認識を探るといふ視角が打ち出されてきたことである。戦後から一九九〇年代までは、研究対象である「東海」地域をおおよそ現在の東海地域と重ね、所与の前提として研究がなされてきたと言えるが、二〇〇〇年代に列島の各地域を対象とする研究が進められた結果、「東海」についてもその対象として認識される傾向が強まり、あわせてその領域や当時の人々の認識を考察する試みがなされるようになってきたことは、既に説いた通りである。

今後の中世の「東海」地域史研究では、おおよそ現在の東海地域内の事象を扱うことは妥当であろうが、その事象を評価する場合、当時の「東海」地域のなかでどのように評価できるのかを考察する必要がある。この考察により、さらなる「東海」地域の実象が解明されるものと思われる。

（三）「東海」地域史に対する方法と批判をめぐって

地域史研究は多様な事象から考察されており、多くの研究が積

み重ねられている。その総体から地域の歴史像は描かれ、評価されるものであり、多角的な視点を備えた成果を踏まえることによって、地域の歴史像は一層豊かになると言えよう。差しあたって、その内容として、次の点を挙げる。

- （i）政治権力、領主、（ii）交通・流通、（iii）民衆・地域住人、（iv）宗教、（v）文化

この他にも時代の変化によつて新たな別の観点や関心に基づく分析が加えられていくことであろう。このように研究が進められていき、地域の歴史像の認識は深まっていくのである。

ただし、現状において、中世の「東海」地域史の蓄積は十分でないように見受けられる。それは、前項で整理した研究成果のうち、（c）の視点を備える、「東海」の特徴として挙げられる事象や歴史像が乏しいためである。よつて、なお多くの分析と考察を積み重ねる必要がある。

このような研究段階において、拙稿では「東海」地域という領域的な一体性が中世史上で強まったと見られる時期を指摘した。³⁰それは政治権力の一体性から読み取った考察であるが、一部には領主権力の一体性から、地域の一体性を説くことに対する批判的な見解が見られる。ここには、民衆の存在から地域を考察、叙述すべきであり、そのような視点や内容を組み込まない研究は学術的に疑問であるという意見さえ見られた。

これは、地域社会論の成果を踏まえた見解であり、民衆のあり様に注目すべきということなのであろうが、地域史で民衆に触れ

ていなければ、学術的に疑問として、評価できないという姿勢、それは私見によれば、自身の注目すべき事象に触れていないと批判することと同義に思われるが、実のところ、地域の歴史像を構築する試みを停滞させかねないものと感じられる。本来のあるべき研究の方法としては、それぞれの観点から探った歴史像から議論するものである。政治権力から「東海」地域の一体性について読み取った研究に対して、民衆の観点から批判をするならば、民衆の活動を通じて、「東海」地域においてどのような特徴が読み取れるのかを示したり、他の歴史事象によれば、政治権力からの「東海」地域の一体性がうかがわれる時期とは、別の様相が見出されたりすることなど、具体的な根拠や歴史像を提示した上で、議論を重ねていくべきである。政治権力の変容は民衆の動向とも深く関わるであろうから、その動向を今後の課題として探るという姿勢が望ましい。

拙稿では、(d)の視角に基づき、中世における「東海」という地域の一体性を探ることを試み、多くの史料を調べた結果、政治権力の点から「東海」地域の一体性を高めたことと見受けられるという私見を述べた。当時の検討において、様々な事象のうち、その点が最も「東海」地域の一体性をうかがいうる事象であると判断したからに他ならない。少なくとも拙稿の検討時点で、民衆の動向から「東海」地域の一体性を提示する史実を見出すことはできなかった。拙稿では、差しあたり政治権力から「東海」地域の一体性を強めたと見受けられる時期を指摘したに過ぎないため、

その当否も含めて、今後はそれがもたらされた要因を、様々な観点から考証することが求められよう。民衆の動向も政治権力の展開にいかに対峙し影響を及ぼしていたかは、以上の指摘をもとに考察されるべき課題である。

このように研究の進展には段階があるため、はじめから完成された叙述を備えることは困難である。いわゆる地域史にはある地域の全体的な歴史、つまり先述した(i)～(v)のような多面的な叙述が求められる傾向にある。多くの自治体史もそのような構成になっている。そのため、自らの重視する論点が組み込まれていないと、その地域史全体を低く評価する批判がなされることがある。このような点は、既に谷口雄太も指摘している⁽²⁰⁾。地域史を豊かにするには多様な成果を踏まえるべきであるが、描き切れない側面は必ず生じるものである。それを多くの立場から補いつつ、さらなる豊かな全体像の構築に向けて努力がなされるべきであることを確認しておきたい。

おわりに——中世の「東海」地域史研究の課題——

本稿では、中世の「東海」地域史研究に対する研究史の整理と分析方法、評価について述べた。近年の中世の「東海」地域史研究の成果と方法論に対して、疑問を寄せられることがあったが、そのようなことは既に先行研究のなかで多くの研究者が検討、考察している経緯を確かめた。また、中世史の分野において、一九

九〇年代以前に東海地域を対象とした研究はあまり多くうかがわれなかったが、東海地域の歴史や特質を論じる上で、取り上げられている事象は大変興味深い内容であった。今後も伊勢湾のあり様や木曾三川など、水上での交通・流通活動は「東海」地域を考察する上で、なお留意する必要がある。海と川、そして京都と鎌倉を結ぶ道の視点は、「東海」地域史を考察する上で、非常に重要であると考ええる。

「東海」地域の窯業とその流通、また政治権力としては今川氏の存在は他地域と差異化を示す独自性が強調されていた。このような論点は今後も多く見出されていくことであろうが、これらの事象が的確に評価され、多くの人々にその評価が共有されていくとともに、さらなる新たな課題が提示され、「東海」地域史の研究が進展していくことを願う次第である。

最後に既に本論でも触れたが、あらためて、「東海」地域に関する一体性とその認識について確認しておきたい。

近年の研究では、中世における「東海」地域の一体性について、既にそのような見通しは示されている。例えば、拙稿では、鎌倉幕府の成立により、幕府の支配する東国を「関東」とする認識が徐々に定着したのではないかと指摘し、東海道領域から「関東」地域を除いて残された西域が「東海」地域と見なされる作用をもたらし可能性について言及した。⁽³³⁾『東海道中世研究2 領主層の共生と競合』の「はじめに」では、岡野友彦が古代の東海道の各国に触れつつ、「鎌倉幕府の成立により、このうち三河以東を

幕府管轄下の「東国」とする新たな区分が生まれ、さらに室町時代になると、今度は伊豆・甲斐より東が鎌倉府（鎌倉公方）の管轄下となる。こうしていわゆる関東地方が古来の「東海道」から切り離された」と説かれている。⁽³⁴⁾このように今日では、「東海」地域の成立やその一体性が歴史的に形成されたことを展望する段階にある。

ただし、その「東海」地域の一体性や人々の認識はどの程度強く意識されていたのか、現時点ではなお十分に論証されていないと言つてよいであろう。この点の解明は大きな課題である。さらなる研究を期すこととしたい。

注

- (1) 水野智之「シンポジウム「日本中世史のなかの東海地域」の開催にあたって」(『年報中世史研究』三八、二〇一三年)。
- (2) 山田邦明・水野智之・谷口雄太「鼎談・「東海の中世」とは何か」(『本郷』一七三、吉川弘文館、二〇二四年)には、「東海の中世史」の企画、編集の経緯が述べられている。
- (3) 岡野友彦・大石泰史編『東海道中世史研究2 領主層の共生と競合』(高志書院、二〇二四年)。
- (4) 「討論記録」都鄙の連関と相互認識(中世史研究会編『日本中世の東西と都鄙 中世史研究会五〇周年大会論集』思文閣出版、二〇二四年)、三五六・三六〇頁。
- (5) 本多隆成「書評・山田邦明編『東海の中世史』⑤信長・家康と激動の東海」(『織豊期研究』二七、二〇二五年)、藤原大志「例会報告要旨 五月例会 書評会『東海の中世史』第四巻」(『静岡地域史研

研究会報』二六二、二〇二五年。

(6) 水野智之「書評と紹介・岡野友彦・大石泰史編『領土層の共生と競合』(東海道中世史研究2)」「『日本歴史』九二九、二〇二五年)。

(7) 水野智之「『東海』地域の成立と京・関東」(前注(4) 著書に所収)。

(8) 森浩一「基調講演『東海学』の創造をめざして」(森浩一編『第八回春日井シンポジウム東海学の創造をめざして』五月書房、二〇〇一年)、九二頁。

(9) 「鼎談 東海と東山、南北縦断的な地域構造、拡散と定着」(前注

(8) 著書所収)。

(10) 大下武「『東海』のなかの尾張と美濃——とくに古東海道と古東山道について」(前注(8) 著書所収)。

(11) なお、筆者も二〇一六年十一月の第4回東海学シンポジウムで、東海学の一環として織田信長と朝廷・幕府に関する報告を行った。

水野智之「織田信長と幕府・朝廷」(『第4回東海学シンポジウム資料集「いくさの歴史II」継体と信長に絞って」木野瀬印刷株式会社、二〇一六年)。

(12) 中村栄孝『東海風土記』(吉川弘文館、一九七一年)、一一二頁。

(13) 前注(12) 著書、一頁。

(14) 前注(12) 著書、四〇頁。

(15) 三鬼清一郎「朝鮮役研究史の一齣——中村栄孝氏の業績をめぐって」(『三鬼清一郎編『織豊期の政治構造』吉川弘文館、二〇〇一年)。

本文に記した中村栄孝に関する経緯や学問的立場の理解は、おおよそ三鬼論文に拠る。

なお、中村の専門分野は日本と朝鮮の関係史であり、その成果は『日鮮関係史の研究』(全三巻、吉川弘文館、一九六五年、一九六九年)にまとめられている。豊臣秀吉の朝鮮出兵の目的について、中村は「対外領土獲得説」に立つ。三鬼は「秀吉の外征の目的は明(中国大陸)を併合することであり、朝鮮を直接侵略する意図はもって

いなかったという点が、氏の研究の根底にある主張である」と説くが(三五九頁)、『東海風土記』「IV郷土研究室 五 信長・秀吉・家康(二)——朝鮮出兵の意味するもの」(二六〇頁、一九五七年三月)には、「秀吉の出兵は、相手の朝鮮にとってみれば、いつどのように考えても、侵略戦争の典型的なケースでしかありません。ことに、全く理解のできない、強引な外交交渉から出発して、長期にわたって、国の大半をふみにじられたのですから、朝鮮政府はもちろん、民衆のすべてにとつて鬼畜もただならぬ侵略で、にくしみは骨の髄までしみこんでいます。永久に朝鮮民族の脳裏にふかくきざみつけられています。」と述べており、中村が戦前・戦後で主張が一貫し、基本的な論旨に変化がない、という評価はやや疑問が残る。

(16) 中村栄孝「朝鮮における国史教育」(『朝鮮』三〇四、一九四〇年)、同「国民学校国民科教則案について(四)」(『文教の朝鮮』一九〇、一九四一年)、前注(15) 論文、三六五—三六六頁。

(17) 中田実「まえがき」(安藤慶一郎・中田実・牧野由郎編『東海社会論』東信堂、一九八六年)、一頁。

(18) 中田実「序章 東海社会研究の視座と課題」(前注(17) 著書)、一三頁。

(19) 塚本学「第二節 東海地方の歴史的展開」(前注(17) 著書)。以下、本文の引用はいずれもこれに拠る。なお、塚本は「地域史研究の課題」(『岩波講座日本歴史25 別巻2』岩波書店、一九七六年所収)を執筆している。

(20) 前注(19)、三六頁。

(21) 塚本学・安藤慶一郎「第一節 思想的伝統と背景」(前注(17) 著書)。

(22) 中田実「終章 東海地方の特質と課題」二五一頁(前注(17) 著書)。

(23) 前注(7) 論文。

(24) 前注(18)、六一七頁。

(25) 前注(18)、七頁

(26) 前注(1)。

(27) 前注(18)、八頁。

(28) 前注(2)では、「東海」地域としての評価が十分でなかった経緯に触れている。

(29) 岡野友彦「権門都市宇治・山田と地域経済圏」(『年報中世史研究』三八、二〇一三年)、同「東海地方の伊勢神宮領」(前注(3) 著書)。

(30) 前注(7) 論文。ここでは、十四世紀後半以降に土岐氏が美濃・尾張ひいては伊勢国の守護として勢力を強め、三河・遠江・駿河国では足利一門による勢力が「東海」地域に広く展開した時期に、「東海」地域の一体性が鎌倉時代以前より強く認識された(「東海」地域成立の第一段階)と指摘した。その後、「東海」地域の政治的な一体性、連関性は脆弱になったが、永禄年間に斎藤・今川氏は織田・松平(徳川)氏に屈服することで、尾張・美濃・伊勢・三河・遠江国に織田・徳川連合政権が展開し、「東海」地域の認識は強まったこと(「東海」地域成立の第二段階)を説いた。

(31) 歴史学研究会日本中世史部会運営委員会ワーキンググループ「地域社会論」の視座と方法―成果と課題の確認のために(『歴史学研究』六七四、一九九五年)等。なお、一部にはここでの地域社会論を民衆と領主権力から地域を捉えるという二項対立的な議論として理解する向きがあるが、実際のところ、「地域」と「国家」の相克や、「制度的地域」の対極に自律的に形成される「歴史的領域」の究明など、多くの研究成果と分析視角を踏まえて立論されているのであり、そういった内容をよく掴む必要がある。

(32) 谷口雄太「『東海の中世史』の書評会をうけて」(前注(5)『静岡地方史研究会報』二六二、二〇二五年)。

(33) 前注(7) 論文。

(34) 岡野友彦「はじめに」(前注(3) 編著)、一頁。